

中部山岳地域・筑波大学八ヶ岳・川上演習林におけるヤマネ研究の展開 ：ヤマネの調査用巣箱の発明と日中の休息場所

門脇正史（筑波大学農林技術センター八ヶ岳演習林）・玉木恵理香（筑波大学大学院生命環境科学研究科生物資源科学専攻）・杉山昌典（筑波大学農林技術センター八ヶ岳演習林）

巣箱の発明

ヤマネ *Glirulus japonicus*（国の天然記念物、準絶滅危惧種）は森林に依存した種であり、開発による森林の減少・分断化による影響が懸念される。その保護が必要であるが、夜行性で発見・捕獲が困難なことから、野外での生態的情報はあまり多くない。

ヤマネの調査には、一般的に小型鳥類用の木製巣箱が用いられてきたが、購入費用や製作・設置に労力がかかり、設置後3年程度で劣化するので耐久性もない。調査の効率化のためには巣箱の改良が必要だと考えられる。

本研究では、安価で耐久性のある塩化ビニル樹脂性パイプと木材を組合せた改良型塩化ビニル樹脂製巣箱（以下、塩ビ管巣箱と略する）を考案した。塩ビ管巣箱と市販の鳥類用木製巣箱（以下、木製巣箱と略する）との間で、ヤマネによる利用を比較することにより塩ビ管巣箱の有効性を検証することを目的とした。

調査は筑波大学八ヶ岳・川上演習林で行った。調査地の林道・歩道等の樹木に塩ビ管巣箱と木製巣箱を各100個ずつ設置した。2009年6月～11月の間に月に1～5回巣箱を観察し、巣箱利用動物と巣箱内容を記録した。捕獲したヤマネは、体重測定、雌雄判別、個体識別用の標識を付けた後放獣した。

ヤマネは、塩ビ管巣箱と木製巣箱の間で利用には差がみられなかった。それに反して、他の動物による巣箱利用には違いがみられた。ヒメネズミは塩ビ管巣箱より木製巣箱を多く利用していた。ヒガラは木製巣箱のみで繁殖していた。他の動物による利用が少ないほどヤマネが巣箱を多く利用できると考えられる。このことから、木製巣箱より安価でヤマネ以外の動物の利用が少ない塩ビ管巣箱はヤマネの調査において有効ではないかと考えられる。この巣箱は特許出願（特願2010-182997号）中である。

日中の休息場所

2010年には、川上演習林で上記の巣箱を用いて捕獲したヤマネに電波発信機を装着して放獣し、日中に潜んでいる場所（日中の休息場所）を27箇所（各ヤマネによる延べ利用回数では31回）特定した。延べ利用回数を人工林(n=22)と天然林(n=9)別にみると、樹木の利用がそれぞれ21回(95.2%)、9回(100%)であったのに対して、樹木以外（地下）の利用は人工林で1回(4.8%)、天然林で0回(0%)と圧倒的に少なかった。ヤマネは日中の休息場所として樹木に依存する傾向が強いことが示唆された。人工林と天然林を合わせた樹木の利用回数の内訳は、高所のため詳細が特定できなかった樹上が20回(66.7%)と最も多く、樹木に架設した巣箱が6回(20.0%)、樹洞と根元がそれぞれ2回(6.7%)であった。

今回の報告は途中経過であり、2011年にはさらに詳細な調査を進める予定である。